



「きぼうのいえ」の屋上の礼拝堂でお話を聞く。中央が施設長の山本雅基氏、右隣が美恵夫人。

特集 1

「死」からの学び Death Education

江原啓之、 山谷のホスピスに行く

高度経済成長時代は日雇い労働者でにぎわい、
現在は生活保護を受ける人や路上生活者が多い町、山谷。
そんな東京のドヤ街でホスピスを開いた人物がいた。

文……江原啓之 撮影……大森 悟



ビジネスホテル風の外觀（右）。
下町出身の江原氏は、すぐに地元
の人と親しくなってしまう（左）。

なぜ、ホスピスなのか

編集部が取材のセッティングをして
くれて、「山谷のホスピス」を訪問する
ことになりました。「将来、ホスピスに
やってみよう」と考えている私にとっ
て、参考になるだろうと言うのです。

スピリチュアリストとホスピス、普
通に考えれば、何の関係もなさそう
なのに、なぜ私が関心を持ったのか。ホ
スピス訪問記を報告する前に、そのこ
とから簡単にお話しましょう。

ホスピスに関心を持つようになった
きっかけは、このあとの『がん患者と
の対話』を読んで欲しいのですが、他
にも大きく二つの理由があります。

一つは、これまでのスピリチュアル
な世界の取り上げられ方や霊能力者の
人たちに對して、私は否定的なんで
す。テレビ番組等で「ここに霊がい

る」と「霊視」したり、結局は夏に涼
しくするぐらいの役にしか立っていま
せんでした。「たましいは永遠」と唱
えるスピリチュアリストがより世間に
貢献できるのは、生死に関わることで
はないか。死を目前にした人たちに對
してお役に立てる、福祉的な技術者と
いう捉え方があっていいと思っただ
けです。その活躍の場として、ホスピス
があってもいいのではないかと。

二つ目の理由は、私が十五年間カウ
ンセリングをやっていて感じたことに
あります。実際のカウンセリングで多
くの人が望んでくることは「現世利
益」でした。来る日も来る日も、「儲
かりますか」「いい恋人が出来ますか」
とか、そのような話ばかり。私が個人カ
ウンセリングを止めた原因は、そこに
ありました。そういう相談に答えてい
ても、本当のスピリチュアリズムは理

解されないなと思ったからなのです。

でも、人間は本当に行き詰ったと
き、死を目前にしたとき、どんな地位
も名誉も関係なくなってしまう。
スピリチュアルな世界ではヒーリング
という治療の技術もあります。ヒー
ラーの本来の役目は、病を治すこと
ではなくて、たましいを癒すこと。そ
の人がこの世の執着をなくし、安らか
に亡くなることであったら、ヒーラー
としては最高の仕事なのだと思います
（ヒーラーについても、『がん患者との
対話』で触れています）。

スピリチュアリストが現世利益のカ
ウンセリングではなくて、世の中に對
して何が出来るか。そう考えたときに
到達したのは、やはり死を目前にした
人たちに、自らの霊性に目を向けても
らうことではないかという思いでし
た。

それに、日本にあるホスピスのほとんどがキリスト教などの宗教系です。純粹にたましいとは何なのか、人生に何の意味があったか、「たましいを見つめる哲学」(スピリチュアリズム)が、ホスピスにあってもいいだろうと思っただけです。

こうした理由で、ホスピスに関心をもつようになったわけですが、今回訪問するホスピス「きぼうのいえ」は、それについて書かれた本をちょうど読んでばかりでした。ある会で「きぼうのいえ」で働く女性の人を紹介され、その施設の長山本雅基さん(四三)の著書『東京のドヤ街・山谷でホスピス始めました。』を彼女からいただいたき、目を通していました。ですから、編集部から話が合ったときも、「是非、行きましょう」ということになったんです。

私の事務所から、編集者さんたちとタクシーで向かいました。台東区にある山谷のドヤ(簡易宿泊所・ヤドを反対に読んだのが語源だそうです)街に入ると、突如、瀟洒なタイル貼りの四階建ての集合住宅が見えてきました。それが「きぼうのいえ」でした。この辺りは東京の下町に当たります。私自身も下町生まれなので、この町の雰囲気には懐かしさを感じるほどです。しかし、タクシーから降りると、何やら違和感がビビッと……。霊ではありませんよ。周りを見ると、付近の路上で日向ぼっこしたり、タバコを吸ったり、ワンカップを飲んだりしている老人たちが目をシロクロさせて、私たちを眺めています。そう、この町にはタクシーで来る人なんてめったにいないんですね。取材中で、もともと場違いな感覚を覚えた瞬間でした(笑)。

「死を待つ人の家」の日本版を

さて、玄関で私たちを笑顔で迎えてくれたのは、施設長・山本さんの奥様、美恵夫人。さっそく「きぼうのいえ」の屋上にある小さな礼拝堂に案内されました。礼拝堂はキリスト教様式ですが、イエス像を前にして仏教の施餓鬼供養をしたり、お釈迦様の誕生日を祝ったりすることもあるようです。

この礼拝堂ひとつとっても、「きぼうのいえ」が形にこだわらない施設であることがよくわかります。ここで山本ご夫妻の話を聞くことになりました。「どうして、山谷にホスピスを建てることになったのか」など、聞きたいことはたくさんありますが……。

その前に——。「山谷」という地名が出てきましたが、若い読者の方にはもしかしたら、どんなところか知らない

かもしれません。ここで山谷について、少しだけ説明しておきましょう。

東京都の地図には、山谷という町名はありません。山谷という町名はありません。山谷という町名は昭和四十一年の住居表示によって消滅してしまいました。「山谷」と言われている地域は、

現在の台東区清川と日本堤辺りを指します。

山谷には戦前から貧困層や労働者が住んでいました。戦後になると、東京都は戦災で焼け出された人々のために仮の宿泊施設を建て、これが後の

山谷・ドヤ街のもととなります。高度経済成長期になると、労働需要が高まり、日本有数の寄せ場となりました。高度経済が終わりを告げると、日雇労働者たちは職を失っていきまし



入口を入って、すぐ左側にある「聖フランチェスコの祈り」。

た。昭和六十年代のバブル経済期になると、ビル建設工事の急増などで山谷は再び活気を取り戻します。しかし、バブルが弾け、平成不況に突入すると生活環境はどんどん厳しくなってい

れば、路上生活を選ぶ人もいます。

そんな山谷の地域にホスピスを設立した山本雅基さんは、聖職者のような佇まいを持つ人でした。この礼拝堂の壁には、「聖フランチェスコの祈り」が額に入って飾られています。そういえば、玄関にも木製の壁掛けがあった、同じ祈りが書かれていました。

聞くと山本さんは高校生の頃に、最も著名な聖人の一人である「アッシジのフランチェスコ」の生涯を描いた『ブラザー・サン シスター・ムーン』を見て、感動したと言います。奇しくも私もこの映画を大学時代に見て、「聖フランチェスコのように生きたい」と思ったことが、現在のスピリチュアル・カウンセラーの仕事へとつながっています。初対面ながら、山本さんには何か親しみが湧いてきました。

ホスピスを個人で建てるなんて、山

本さんはお金持ちなんだろうと思われ
るかも知れませんが、資産家ではない
とおっしゃいます。警察官僚のお父さ
んと専業主婦のお母さん、それにお姉
さんの四人家族の家庭で育ちました。
幼い頃から哲学的な少年だったよう
です。高校を二年で中退しますが、通信
制の大学に進み、その一方で様々なボ
ランティアを続けるなど、寄り道の多
い人生を歩んできたそうです。

お父さん曰く、「三度の飯よりも人
助けが好き」な山本さんは、悩み苦し
む人たちと共に人生を歩もうと、神父
を目指します。二十七歳で上智大学神
学部に進み、修道院にも入りました。
「聖フランチェスコを目指したのだす
が、自分の中で女性を見ると、結婚し
たくなってしまいう思いが残っていまし
た。神学生の頃、上智大に隣接してい
るイグナチオ教会で『神さま、どうか

道をお示してください』と祈っている
と、後からコッコツと女性のハイヒー
ルの音がする。思わず、どれだけかわ
いい人か顔を見てしまふんです(笑)。
そんなことを繰り返しているうちに自
分はダメなんだと……」(山本さん)

結局、修道院生活に挫折した雅基さ
んは、学生ボランティアとしてファミ
リーハウスの実現と運営に関わるよう
になります。小児がんなどの難病の子
どもと、付き添いの家族のために宿泊
施設を開設するべく、奔走しました。
大学卒業後はその専従スタッフとし
て働き、平成十三年に退職しました。
仕事を辞めた後、バーンアウト(燃
え尽き症候群)になった山本さんでし
たが、新しい目標を見つけます。それ
が二十歳の頃から関心のあったホスピ
スでした。「ホームレスのような見捨
てられた人々のためのホスピスをつく

ろう」と決心したのでした。目指した
のは、マザー・テレサの「死を待つ人
の家」の日本版だったと言います。

「ホスピスをやるなら山谷しかない
と、思っていました。ここで行き倒れにな
りそうなオジサンやオバサンを助ける
ホスピスを建てるのだと意気込んでい
ました。次第に、この町にはボクのよ
うな人間を受け入れる許容力が凄くあ
ることが分かったのです」

山谷しかないとは思っていても、墨
田区、台東区、葛飾区……五十件以上
の物件を見たそうです。

「例えば、田園調布や赤坂、青山で、
こういう取り家の家を建てようとした
ら、地元住民の反対運動にあって潰さ
れてしまったでしょう。現に足立区で
は一軒家を借りてやろうとしたのです
が、『ホームレスの施設なんて作るな』
と地元で反対されてしまいました。

幸い、ここでは住民の反対運動は全
くありませんでした。ボクは当初の
『ホームレスのためのホスピス』から
『行き場を失くした人のための終のす
みか』と方針を変えていきました。山
谷では、『身体のコンディションが芳
しくない人を入れますからよろしくお
願います』と触れ回りました。

地元にいる普通のお年寄りには、『ワ
シも住めるかも知れない』と、安い有料
老人ホームでも建つのかと思つたみた
いです。ドヤの人たちにすれば『オレた
ちの先輩が入るんだ。オレたちだって、
年を取れば入れるかも知れない』と感
じてくれたようですね。高齢者と関係
ない人は、『道路に寝転がっている人
たちがこざつぱりした施設に収容され
るのだから、それも良からう』くらい
に受け止めてくれたのでしょう」
山本さんは、立ち上げ当時を振り返

って、こう語りました。最終的には、
当初から希望していた山谷に土地を見
つけられたわけです。美恵夫人とも
「きぼうのいえ」を手伝ってくれるボ
ランティアを探している過程で知り合
ったとか。やはり人生に「偶然」はあ
りません。私がいつも言っているよう
に、すべては「必然」なのです。

神様が何とかしてくれる？

現在「きぼうのいえ」が建つ場所は、
もとは銭湯だったところで、土地は四
十坪。鉄筋四階建ての中に、個室が二
十一室あります。この他に、食堂、診
察室、厨房、浴室、トイレ、洗濯室、談
話室、事務室などがあり、屋上には私
たちが案内された礼拝堂が設けられて
います。冷暖房完備の居室は四・七畳
の洋室で、介護用ベッド、ナースコー
ル、ビデオ付きテレビ、洗面台、クロ

ーゼットが備え付けられています。
二〇〇二年十月にオープンしました
が、施設を立ち上げるためには一億五
千万円もの資金が必要でした。美恵夫
人がOL時代に貯めた一千万円も使い
果たし、銀行からの融資や賛同者から
の寄付で賄ったと聞きました。

しかし、支払い期日の直前になって
も手元に資金が集まらなくて、お手上げ
の状態になったことも数え切れないほ
どだったとか。不思議なことに、窮地
に追い込まれるたびに、絶妙のタイミ
ングで寄付金が振り込まれたことが一
度ならずあったと言います。

「二週間後に五千万円の支払いをしな
ければならない状況になった時には、
さすがに周囲も心配そうでした。でも
ボクには、『これは神様の仕事だから、
神様が何とかしてくれるはずだ。これ
は信仰なんだ。助けてくれない訳がな

い』という信念があったのです。

その時には、寄付をお願いしに行つた都内のある修道院で『シスターたちはお祈りをしてください。私は街中でその祈りを実際のエネルギーとして体現しますから』と申し上げたところ、『あなた方の銀行はこの支店なの？』と質問され、これは脈があるなと感じました。暗に『いくら欲しいの？』と言われたので、私はちよつと欲張つて二倍の『一億円です！』とお答えしたのです。数日後には、きつちり五千万円の入金通知が来ました。正直なところ、一億円あればその後の運転資金もできて安定できたのですが(笑)。

私も思わず、『神様はそこまで甘い、なかなか安定させてくれないものですよ』と言つてしまいました(笑)。

山本夫妻は資金繰りの苦勞を明るく笑い飛ばしていました。やはり『大我

の愛』に満ちた仕事をする人には、共通したところがあります。イエス・キリストにしろ、聖フランチェスコにしろ、マザー・テレサにしろ、きつとユニモアにあふれた、明るく楽しいタイプの人間だったのだろうと思うのです。そうでないと、その人自身のエナジーも湧かないだろうし、また人もついてこないのではないでしょう。

その『笑い』がときとして、奇跡を呼ぶのではないかと、私は思います。苦しくても、自分のたましいの中で、『神』を信じているから、笑えるのではないのでしょうか。私のそんな考えに對して、山本さんがこう言います。

「ここに笑いながら入居してくる人はまずいません。最初はみんな頑なに心を閉ざしています。でも、ボクらが関わり合っているうちに、入居者の態度がふつと変わることがあります。そ

のきつかけは、やはり『笑い』が出たときです。最近ですと、入居当初は人格障害かと思われたような人物が、あるときから女性スタッフに『さくら、さくら』と呼びかけ出しました。映画『男はつらいよ』の寅さんを真似たギャグを言い出したんです。そのあたりから人柄が大きく変わりましたね」

「きぼうのいえ」には約五百巻のビデオライブラリーがあり、入居者が自由に見られるようになっていきます。なかでも、一番人氣が『寅さんシリーズ・男はつらいよ』で、全巻そろえているとか。その男性も言うまでもなく、『寅さん』ファンでした。

やはり『笑い』は、人を大きく変えるものなんです。

食事の大切さ

そこで私が興味を持ったのは、『笑

い』だけではなく、食べ方も変わるのではないかと意識してしました。子どもは天真爛漫に食べていますが、心を閉ざす人は、そうではありません。ただの栄養として食べているような気がするからです。食事については、美恵夫人がこんな話をしてくれました。

「私たちは割りと危険を顧みずとか、お医者さんならば許さないのではありません。その人の力を信じて、食べたいときに食べさせてあげるんです。そうすると、何も食べられない人が食べられるようになってしまふんです。胃ろうでチューブで食事をとっていた人のうち何人か口から食べられるようになったこともあります」

ものを食べるということは、栄養だけではなく、そこにある『愛情』を食べるということだと私は思っています。愛情があれば、そういう奇跡のよ

うなことも起きるのではないかと。美恵さんの話を聞いていくうちに分かったのは、ここでは、やはり食事を非常に大切にしているということでした。「ここを始めたときに大切にしたいのが食事でした。給食業者さんを一年に四回変えたこともありまして、『朝食時にはホカホカの御飯を取り分けて、湯気を見せてあげてください、卵焼き一

品でいいから手作りのものをお願いします』といった要求に對して、『そんな手間がかかることをやったら、人件費が高く付きますよ。冷凍食品をチンして出せばいいじゃないですか』と言われたこともありまして」

たとえ給食業者であつても、『ハートのある企業』を探し求めたと言います。また、『きぼうのいえ』では、入居者の飲酒・喫煙も許可していて、

「人工透析をしている方で、焼酎に梅干をいくつも入れてがんがん飲んでしまふ人がいました。ときたま心不全を起こして病院に運ばれ、翌日に迎えに行くとき、もうベッドの上で『酒! 酒!』と大騒ぎしているのです。私たちは何度も説得して止めさせようとしたのですが、かえって『飲んでやる!』と言って、一度に2リットルくら

い飲んで救急車で運ばれるという



清潔に整えられた「きぼうのいえ」の食堂。

ことを繰り返していました。

いろいろ考えまして、思い切って全部許すことにしたのです。そうしたら、不思議とビタリと収まってしまいましたね。たとえ、飲んでも無茶飲みはしなくなったのです。こんなことは病院や他の施設では絶対に許されないことなのですが、ここでは「家族の一員」として許しています。それが彼にとって幸せならば、少し命が短くなっても……、という思いがあります。何かあったら、私たちがしっかりとケアすればいいのですから」

ここで「えーっ、ホスピスでお酒飲ませていいの」と思った読者のために解説しておきましょう。一般的にホスピスと言うと、病院などの施設に付随する「施設ホスピス」を指します。国は一定の施設・人員配置基準を満たす緩和ケア病棟に対して、定額の診療報酬



我が家のようにくつろげる談話室にて。

酬を支払う制度があるので、これに沿って運営されています。

これに対して、「きぼうのいえ」のような在宅の形でホスピスケアを行なうことを「在宅ホスピス」と言います。在宅ホスピスは体が元気なうちは外の病院に通院し、動けなくなれば担当医が往診して医療的なバックアップをします。つまり、「きぼうのいえ」

は病院ではなくて、その人の「家」なのです。ここは、社会福祉法上では、「生計困難者のために、無料又は低額な料金で、簡易住宅を貸し付け、又は宿泊所その他の施設を利用させる事業」を推進する「宿泊所」の扱いになっています。

ですから、入居者からもらっているのは、あくまでも三食付の「宿泊料」。月額十四万三千五百円で、生活保護を受けている人が利用できる料金に設定されています（東京都の生活保護費は平均で十五万円程度）。それでも年間一千万円以上の赤字続きで、有志からの寄付が頼りになっているそうです。

介護保険対象の施設にすることも考えたことはあるそうですが、そうなるとかえって法律に縛られてしまうので、現在の形式を取り続けています。

入居者の症状もバラバラ。「施設ホ

スピス」だと、末期がん患者とHIV感染者が対象ですが、「きぼうのいえ」の入居者はそういった人たちだけではなくありません。肝炎、心臓病、腎臓病、糖尿病などに苦しむ入居者も多く、中には、統合失調症、認知症の患者が入居するケースもあると言います。

そうした人たちの暮らしを、雅基さん、美恵さん以外に、二十人から三十人のスタッフやボランティアが「家族」として支えているのです。

死を淡々と受け入れる

礼拝堂でお話を伺ったあと、施設内を案内していただき、その後、談話室へと席を移しました。

私にとっては、お話の内容も施設そのものも「目からウロコ」でした。ホスピスというと、すぐに何かすごい介護施設がなければいけないかと思っ

てしまうけれど、「きぼうのいえ」はそうではありません。お風呂一つとっても、大がかりな機材でも入っているのかと思ったら、普通のお風呂。「今日からでも、自分の家に末期の人を迎え入れたら、そこがホスピスになるんだ」と改めて気づかされました。

山本さんは「『きぼうのいえ』って、一体どんなところ？」と聞かれた場合、次のような答え方をするそうです。「二つお答えしているのですが、一つが、東京タワーや高速道路を造ってきただ人、銀座で屋台を四十年間ひいてきた人のように、戦後六十年を市井の一般民として一生懸命生きてきた人にとつての『終のすみか』ですと。

もう一つは、『不幸のデパート』のような人生を歩んできた人が、生き直す場ですと。例えば、幼い頃に親が死んでしまつて養子に出された。そこでも

邪険に扱われて、中学を卒業したらすぐに集団就職。職を転々としながら最後は山谷に流れ着いてしまった。ある日、身体の不調を感じて病院で診てもらったら、末期がんではや手遅れ。こんな今まで誰からも何の関心も寄せられなかった人に対して愛を向けてくれる人がいる場所にしたいんです。

『きぼうのいえ』に対して、『あんな自業自得な自堕落な人たちの面倒なんか見て！ どうせ税金や社会保険料も払っていない人たちでしょ』と考えている方もいますので、存在意義をハッキリさせておきたいのです」

自業自得といった批判には、驚きませんでした。そういう批判をする人は、スピリチュアル的に言えば「小我」の人なのでしょう。『大我の愛』に生きる人は日々感謝の数を数えますが、『小我の愛』の人は不平不満の数を数えます

す。税金や社会保険料を納められることだって感謝の対象です。そう考えれば、そんな批判はでないはずです。

「入居者の人たちは、私たちが考えるような普通の環境にも恵まれていなかったんです。本当に文字が読めない人もいて、便器の外に『ここにはおしっこをしないでください』と書いても、平気でしてしまふ。それで『俺、字が読めないんだ』と笑って言う。『ここに名前を書いて』と言うと、他人に書いてもらった見本を出して、それを写している。結局、人間にはそれぞれが置かれたレベルがあつて、『自業自得』とか一括りには裁けないと思うんです」と、山本さん。これまで「きぼうのいえ」で看取られていった人は、現時点で四十一人になります。その人たちのほとんどが、自らの人生を受け入れていって、死を怖がることなく淡々と

最期の時を迎えたと言います。

「多くの入居者は、ここに来た時には、人生で奪い取られるものは何も残っていないという状況です。その中で、死を受け入れているように思うのです」

しかし、死を同じ受け入れるにしても、「きぼうのいえ」で暮らしている間に、入居者の心ではひそかな「転換」が行われるのではないかと、山本さんは考えています。

「ここへ入居したときには人生に失望していた人が、ボクたちとかかわり、愛情に触れていくうちに『もう少し生きてみるのもいいんじゃないかな』と、心が転換するのではないかなと思うのです。よく『農民は死を怖れない』と言われます。農民は大自然を前にして、自分の存在や日々の営みがどれだけちっぽけなものをよく知って

います。だから、自然が運んでくる死であれば受け入れようと言います。入居者の人たちも、最期は農民のように、自然が運んでくる死であれば受け入れようとして、亡くなっているのではないかと思っています」

あるボランティアの人が母親に「きぼうのいえ」で働くことを伝えたときに、「死にそうなおじいちゃんのおむつを替えて、どうするのよ!」と怒られたそうです。その話を聞いたときは、山本さんも言葉に詰まったとか。「ボクたちなりの死生観をきちんと明確にして、生きていることの延長線上に死後の世界があり、命はそこでも存続するのだということを信じていなければ、この仕事はとてもできません。今まで愛を知らなかったおじいさんがおむつを替えてもらって、尽くされること、それに笑顔で返すことを知ると

に、隣接する土地に『なかよしハウス』という保護施設も運営しています。

「どちらも天涯孤独な人たちが入居していますが、『なかよしハウス』は自立度が高い人たちです」(山本さん)

その他にも、山本さんは半年ほど前にヘルパーステーション「ハーモニ」を立ち上げました。「きぼうのいえ」で体験を積んだヘルパーたちを山谷の各地に派遣しようという構想です。

「ボクは山谷を『きぼうのいえ』のスピリチュアル的な『気』で満たそうと考えています。それは、『きぼうのいえ』の理念・愛といったものをこの十年間で、『嘆きに満ちた土地』である山谷にどうやって広げるかということ

です。それで、『きぼうのいえ』を千戸建てるのは無理だけど、この地域全体を



皆さんと一緒に記念撮影。二十人、三十人のスタッフやボランティアがここを支えている。

これからの山谷

山本さんは、「きぼうのいえ」の他

大きなホスピスとみなして、そこへ人を派遣していけばいいのではないかと考えました。最終的に人を変えることができないのは、母性です。『ハーモニー』から派遣したヘルパーたちが「母性的なスピリチュアル精神」で凍土のようなおじさんたちの心を愛に目覚めさせることができれば、山谷は劇的に変わるのではないかと思います」

山本さんの壮大な「山谷まるごとホスピス構想」を興味深く聞きながら、私は少し違った山谷の将来像もあるのではないかと考えていました。

確かに山谷の住人は高齢化が進んでいますから、その人たちへの対応も大切で。その一方で、今後、悩める若い人もどんどん山谷に流入してくるような気がするのです。愛に満たされず、社会に適応できない「若い放浪者」たちが実際に増えていることは事

実。山谷に悩める若い人が来て、心が目覚めたおじさんたちが、その悩みに答えてあげられる——、そんな「家族」みたいな関係をつくるのが、この地ならできそうな気がするのです。

渋谷辺りを歩いている若者のオーラの色はくすんでいます。山谷のおじさんたちのオーラの色はとても穏やかなのです。山谷は今のまま変らないでも、悩める日本人の精神的な「癒しの聖地」になれる可能性があるとしたら……。そうなって欲しいと語る私に、山本さんが答えます。

「江原さんのおっしゃるように、山谷は社会福祉的にルネッサンスしていく町なのかもしれません。心にハンディを負った若者たちが山谷へ癒しを求めてやって来れば、またそれに応じてケア能力を持った人たちが集まってくるでしょう。なるほど、山谷はそういう

場所になる可能性がありますね」

山本さんとの対話が、「山谷まるごとホスピス構想」から「山谷・癒しのルネッサンス構想」に発展してきました。

私の個人的なホスピス構想が実現するのは、まだまだ先のことになると思います。当分の間は、ホスピスに関わる人をサポートしていこうと思っているのですが、私のホスピスよりも、山本さんが理想を実現していくほうがはるかに早いような気がしてなりません。

取材を終えて、お礼を述べると、帰り際に、山本さんははにかみながら、「いやあ、今日は「癒しのルネッサンス」なんて、難しい宿題をもらってしまいましたね」

と笑っていました。いえいえ、山本さん夫妻ならば、きっとできますよ。

(えはら ひろゆき)